

長島雪操

幕末から明治にかけて、土地の名主として大規模な土木事業に関わる一方、俳句や俳画に親しみ、時の浦賀奉行との親交の中で文人画家として腕に磨きをかけたという長島雪操とは・・・。
今、横須賀ゆかりの画家として、専門家による研究が期待されている。

近世、近代の南画発達の面から、近年になって注目されてきた一人の人物がいます。幕末から明治にかけて、三浦半島で多くの南画を描いた長島雪操です。

雪操は、文政元年（一八一八）、三浦郡八幡久里浜村（現在の久里浜）で生まれ、明治二十九年（一八九六）に七十九歳で亡くなりました。

生家は小字を「松原」といった現在の京急久里浜駅に近い田園地帯にあったといわれます。天保のころ、村の名主を務めていた雪操の父・六兵衛は、久里浜から野比へ抜ける「尻こすり坂」と呼ばれる坂道の開削を企てました。ここは、その名が示すとおり

の難所として知られていました。その工事は難行苦行で、父亡きあとに名主を襲名した雪操が引き継ぎ、明治十七年（一八八四）に竣工しました。その模様は、坂の途中に建立されている記念碑によって知ることができます。

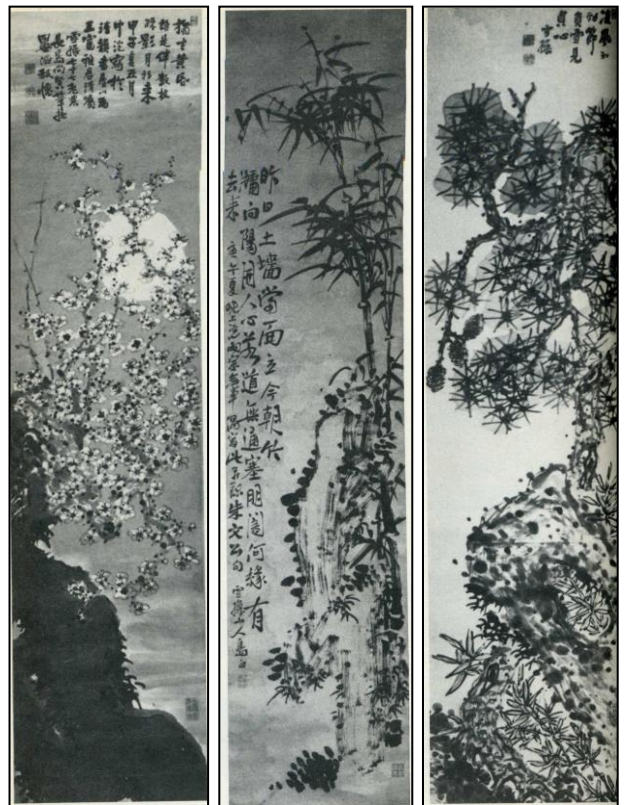
雪操は、この記念碑のほか、満

昌寺の境内に設けられた御霊神社にある三浦大介義明を顕彰する石碑など、数々の書を残しています。

また、若いころより俳諧をよくし、幕末に三浦半島の俳壇の指導的存在でもあった浦賀奉行所与力・中島三郎助（俳号・木鶏）と親しかったともいわれています。雪操は俳句に親しむ中で俳画を

学び、南画の道に入っていたようです。彼の南画修得は、中国書画を参考に、独学でその技法などを身に付けていったものと見られます。このようなことから、雪操は南画とともに書や俳諧にも造詣の深い、文人画家ということができます。

雪操は自らの画業を磨くため、当時の名のある画人や南画の収集家と親交を深めるよう心がけたようです。中でも、弘化四年（一八四七）に浦賀奉行に赴任した浅野長祚は、雪操に大きな影響を与えました。長祚は梅堂と号した画



夜梅図

墨竹図

松竹図

家でもあり、中国書画の収集家としても知られていました。

このように、雪操は名主として村の発展に尽すのみでなく自ら画筆を取り、多くの作品を完成させました。作品の中核をなすのは、文人画の画題の一つである松竹梅や草木の中の四君子といわれる蘭、竹、梅、菊などを描いたものです。

彼の表現には文人画の一般通念を超えた斬新な発想が認められ、その画業は好事家の域にとどまるものではなく、専門画家同等、それ以上に本格的という評価がなされています。しかし、作品の多くは、売ることなく知人の進物

にしたり、子孫である数家にまとまって伝来しているといえます。こうしたことから、雪操の作品は世に出ることが少なかつたものと考えられています。作品以外に、写生画帖、雑記的書画帖や各種の印章なども残されており、横須賀ゆかりの画家としての研究が期待されています。

（芳賀久雄）

南画：南宋画ともいい、水墨などで山水を描く中国風の絵

★参考文献

- ・横須賀人物往来 横須賀市生涯学習財団
- ・新横須賀市史別編文化遺産 横須賀市
- ・長島雪操南面の画手本 編 山内長三

歴史 語りい座・浦賀 四十四

郷土史家

山本 詔一



今日は我が家のアイドル、ペット(柴犬)のお話をします。アイドルといっても歳は十六歳。すっかりおばあちゃんです。我が家にやって着た時の体重は五百グラムに満たないほど小さく、それはそれは本当にかわいらしかったです。

『近世浦賀崎人伝』VIII



— 齋藤練之 —

齋藤練之は齋藤徳兵衛という仙台藩の藩士であった。何があったのかわからないが「義のため」に仙台藩を去り、江戸へ出てきた。さらに浦賀の染物屋の客分となった。染物の上絵描きの技能に優れており、また人と交際をしても信義を失わず、皆が尊敬の念をもつようになつていった。練之が何歳の時に浦賀へ来たのか

わからないが、練之が五十歳で亡くなった文化七年(一八一〇)に東浦賀村の記録に紺屋が一軒あることがわかつていたので、練之はこの客分になつたのであろう。

俳諧を好み自來庵と号して、東浦賀村の村役人をやつた石叟と号した石井曾右衛門や「浦賀文化」四十一号の崎人伝Vに登場した吉崎杉調やその吉崎の友人として登場した田村時調などと、朝、花が咲いたといえはそれを愛で、夕方、月が上つたといつては盃を傾けるといふ風雅な交流が続いた。

幼い時から法華経を学ぼうという志をもつていたので、日蓮宗の六大本山の一つである中山(現千葉県市川市)の法華経寺で戒律を学び、さらに法華経を会得するための激烈な極める苦行の修行を行った。それでいて、周囲の人々や同じ宗門の人、宗旨は違ふが同じように仏門に身を

置く人たちとも気心を通じ合う、豊かな感性を持つていた。

また練之は、連句のいくつかの題のなかからくじで探り取つたもので句を詠み、優れた作品が多いことも有名であった。飾り気がなく物静かで温和な詩人であつた。

客分という立場であつたからであるか、俳諧を誰に師事したとも記されていないが、崎人伝に選ばれたということは、俳諧ばかりでなく、教養の豊かさが日常的に周囲にもよい影響を与えたことと思われる。

— 僧 平来 —

平来は東浦賀の浄土真宗・東教山乗誓寺の住職であり、法号は勧善といつた。平来の生まれは江戸築地であつたが、西本願寺門主からたつての命によつて、乗誓寺の住職に抜擢され、その力を遺憾なく發揮した結果、乗誓寺を復興させたので、中興の祖・勧善傳灯大師として名を残している。

平来は酒を飲むことをしなかつたが、客が来れば必ず盃をもつて饗応した。しかし、客が酔つて間違ひをおこすことを恐れて、宴を納めることも速かつた。また人が戯れに偽りごとを言つても、そのことを疑うことをせず、このために後に悩むことがあるほど実直であり、その姿勢はまことに尊敬すべきものである。俳諧を好み、三代目の皐月平砂に許し受けて入門し、自らは桃源窟と

号した。平来の号も平砂から一字もらつたものと思われる。この時、江戸には数多くの俳人がいる中でとりわけ与謝蕪村とも交流があつた馬場存義や独歩庵を名乗つていた買明、もう一人吉明(この人物については不明)などと交流が深かつたことが記されている。

親しい人が亡くなつた時に詠んだ句に
世のうさを身にこたへけり
やいと(お灸)花
と手向けている。

文化十三年(一八一六)七月に八十三歳で生涯を閉じた。「崎人伝」に取められている人物のなかでは最高齢者であつた。

ここには記されていないが、平来が住職をしていた天明八年(一七八八)に、同じ浄土真宗の僧侶で、学問ばかりか詩画の世界にも通じていた雲室が乗誓寺で塾を開いていたことがわかつている。田沼意次のブレインであつた雲室は田沼が失脚すると、幕府学問所の昌平塾を追われ、さらに江戸の大火で住む家もなくなつてしまつた。こうした状況の雲室に平来が手を差し伸べたとは考えられないであらうか。



笑話一題

今日我が家のアイドル、ペット(柴犬)のお話をします。アイドルといっても歳は十六歳。すっかりおばあちゃんです。我が家にやって着た時の体重は五百グラムに満たないほど小さく、それはそれは本当にかわいらしかったです。



～俳句の散歩道～

冬帽子目深に載せて渡舟待つ
殿木和三人
黒船にゆかりの浦賀冬霞
田尻 陸夫

浦賀コミュニティセンター分館から 特別企画展示会のお知らせ

横須賀製鉄所(造船所)創設150周年記念

浦賀奉行所から 横須賀製鉄所へ

～浦賀の繁栄とわが国の近代化～

平成28年2月20日(土)～3月6日(日)

10時～17時(入場は16:30まで)【入場無料】

浦賀コミュニティセンター分館(郷土資料館)

享保5年(1720)に奉行所が設置され、浦賀は屈指の要港として繁栄していました。幕末の動乱を経て、奉行所は閉鎖されたものの、旧奉行所の待たちもわが国の近代化に貢献しました。往時の浦賀と横須賀製鉄所(造船所)で活躍した人々を写真やパネルで紹介いたします。

詳細は、広報よこすか2月号・ポスター・ちらし等をご確認ください。